

日本の林業を再生せよ

日本の林業の衰退が叫ばれて久しい。だが、再生・復活への新たな光も見えてきている。国産材ならではの良さにとどまり、地元の国産材を使うことで地域に貢献している企業、新たな国産材の需要を掘り起こそうと広域連携で活動している地域などだ。林業復活に向けた取り組みを追った。

解決すべき課題は多いが再生は十分可能



宮林 茂幸氏
東京農業大学教授
農学博士

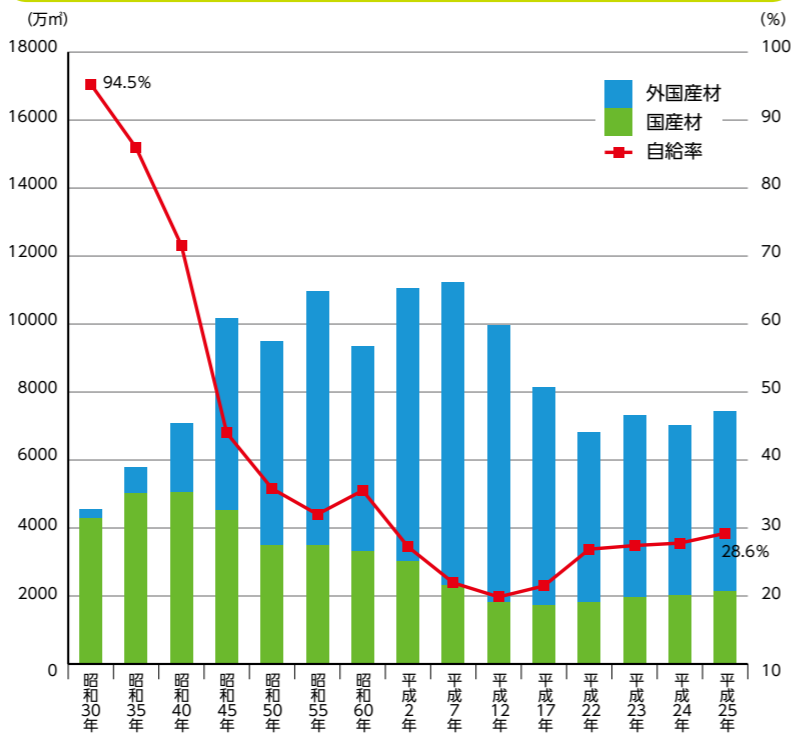
専門分野は林業経済学、森林政策学、森林環境政策学、森林レクリエーション学。社会活動としては林業経済学会会員、日本森林学会会員他、自治体等の要職も務める

森をつくることが大切

農林水産省は森林・林業再生に向け平成21年12月、「森林・林業再生プラン」を策定した。路網（林道・作業道・作業路）整備や人材育成などを集中的に行い、10年以内輸入材に勝てる国内林業の基盤を確立する。これにより、社会構造を「コンクリート社会から木の社会」に転換。具体的な目標に「木材自給率50%」を掲げた。再生に向けた動きが本格化している林業の現状と新たな取り組みを東京農業大学教授の宮林茂幸さんに聞いた。

26年度の『森林・林業白書』によれば、20%前後で推移していた木材自給率はプラン策定以降、3割弱の水準（25年28・6%）まで引き上げられた。宮林さんは、自給率が着実に上がっていることを評価する一方で「森林の育て方、使い方を間違えているのではないかと指摘する。国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、日本の国土に占める森林率は68・5%と高く、先進国ではフィンラ

日本の木材自給率は近年回復傾向 昭和30～平成25年/用材部門



ンド、スウェーデンに次いで3位だ。「日本の森林面積は約2500万ha。その4割に相当する1000万haがスギ、ヒノキなど針葉樹を中心とする人工林です。過去40年間、森林面積はほとんど変わっていませんが、昭和30～40年代の拡大造林により、材積（樹木の体積）は18億m³から46億m³へ増えています。特に、90年代に入って天然林に比べて人工林の割合が大きくなっていきます。ところが材価は下がる一方なのです。だから、切っても採算に合

わなくなってしまう。そのせいで森が放置され、荒れてしまっているのです」
切り出された木材は品質により梁などの構造材に使うA材、集成材として使うB材、チップや木質ボードになるC材に分類され、使われないものはD材（林地残材）として森に残される。山が荒れればA材にならない質の悪い木が増える。また、伐採や搬出などのコストを抑えるために切らないケースもあり問題だ。切りやすく搬出